

えないであろう。

ここで興味深いのは、法然は『選擇集』において「念仏行者必可具足三心之文」として念仏の行者を前提としているのに対し、ここでは散善の行者が三心を起こして念仏に帰するとしているところである。このことは法然の選擇本願の念仏と異なった信の取り方を暗示する。

隆寛が安心起行と言う概念を持っていたかどうかは表面上明確ではないが、往生の正因を『觀經』の三心と考えていたことは間違いない。そこで次にその三心について隆寛がどう考えていたのかを整理してみたい。

第二項 菩提心と三心

隆寛の往生の正因としての心は『觀經』の三心であることは、その著作を通じて明らかである。また、その著作のほとんどで三心に対する見解を示すほど、三心をその教学の中心問題として捉えている。しかし、その三心の見方については隆寛独自の理論も多く含まれているのである。その最も特徴的な言葉が「他力の三心」であろう。その詳細についてはあとで論じるとして、まず最初に往生の正因として持つべき心を菩提心と相対して述べているのでまとめてみたい。

菩提心についての隆寛の見解は『極樂淨土宗義』に往生極樂人は菩提心を起こすべきかと

の間について

於聖道門^ノ菩提心^ハ者^ハ此宗所^ニ不^レ論^ニ也^ハ其^ノ故者^ハ自力修行人者^ハ必^ズ發菩提心^ニ他力往生人者^ハ唯^ニ發三心^ニ順本願^ニ故也

〔隆全〕一、九二頁

とあるように、自力の修行者の持つべき心が菩提心であり、他力往生の人は本願である三心を発さねばならないと言う。また善導の言う「同發菩提心往生安樂国」について

菩提者^ハ仏果名也^ハ是故^ニ求^ル仏道^ヲ者^ハ必^ズ發菩提心^ニ然^レ念^ス仏行人^ノ所求者^ハ極樂也^ハ斯者^ハ來迎也^ハ依之^ニ歸他力^ノ者^ハ必^ズ乘本願^ニ得往生^{コトヲ}但^{シテ}同發菩提心^ノ積者^ハ會^フ之^ニ有^ル二義^一一者^ハ以^テ往生極樂人例^ヲ同發菩提心^ノ人^ニ其^ノ義思而^テ應知^ル二者^ハ撰^ル衆生^ニ令^テ生^ス有^ル仏国土^ニ以^テ之^ニ名^ス為^ル菩提心^ノ之^ニ義也

〔同書〕一、九二頁

というように菩提心とは言っても仏果を求める心とは当然^ニ區別されるべきものであるとしている。

さらに『無量壽經』の第十九願、第三十五願と『觀經』の「五百侍女菩提心」の解釈について十九願の菩提心は弥陀の本願ではなく三心を発したのち來迎を受けるのであり、三十五

願と『觀經』の菩提心は称名の力により往生することすなわち無生を得ることを言う述べ、この益やくを求めるために菩提心と言うのである、とする。このように菩提心について、自力修行の聖道の心としての菩提心と往生浄土の菩提心と同じ言葉ではあるが、意味を分けて解釈しているのである。

第三項 行具の三心

隆寛の残された著作の中、和語のものには自然に三心が具するという言葉があるが、漢文のものにはない。和文体にあるのは正しく法然の言う行具の三心であるが、漢文体のものではむしろ他力の三心を強調するのである。しかし、行具の三心の根柢になる解釈は見るこ
とができる。

まず『捨子問答』巻上には法然の言葉として

三心ハコマカニ沙汰シテ知ネドモ。念仏ダニモ慳ニスレバ。自然ニ具足セララル、
也。サレバコソ。三心ト云名ヲダニモ知ザル在家ノ無智ノ人ニモ念仏シテ神妙ニ
往生スル事ナレト

〔続浄〕九、七頁上